様々な中陰と浄土宗の考え方

人が亡くなってから四十九日の間を中陰(中有)と言い、この期間中は七日ごとに亡くなった方の為に法要を勤めたり、毎日親族がお線香を上げ続け、お墓参りや御詠歌を行うことが慣習となっています。では何故このようなことをするのかについて、一般的な仏教から見た中陰と浄土宗としての中陰の見方について説明させて頂きたいと思います。

ただ、この中陰の考えについては浄土宗内でも学者さんによって解釈が変わるので、私の解釈が正しい訳では無いと言うことを始めにご理解頂けると幸いです。

『地蔵十王経』に説かれる中陰

・ここに書かれている中陰は一般的な考え方で、七日ごとに来世にどこに行くのかの裁判を受けるとされる。

中陰	裁判官	行われる裁判	救済の仏	備考
初七日	泰広王(しんこうおう)	生前の無駄な殺生の確認	不動明王	
二七日	初江王(しょごうおう)	盗みなどをしていないか	釈迦如来	三途の川を渡る
三七日	宋帝王(そうたいおう)	不貞行為をしていないか	文殊菩薩	
四七日	五官王(ごかんおう)	罪の重さを秤ではかる	普賢菩薩	
五七日	閻魔大王(えんまだいおう)	浄破璃(じょうはり)の鏡で罪を裁判	地蔵菩薩	
六七日	変成王(へんじょうおう)	もう一度裁判(再審)	弥勒菩薩	
七七日	泰山王(たいせんおう)	来世が決定	薬師如来	

この後、地獄や餓鬼道などに落ちた人は、百箇日は平等王と観音菩薩、一周忌は都市王と勢至菩薩、三回忌は五道転輪王と阿弥陀如来というように三十三回忌まで何度も再審が続き、救済のチャンスが多く設けられています。

このことから一般的な寺院では、裁判の前の日には逮夜として親族が集まり、住職と一緒にお経を唱え、少しでも裁判の助けとなるように回向し、亡くなった方が少しでも早く極楽へ行くことを願います

浄土宗における中陰の考え方

　では次に、浄土宗の中陰について説明していきましょう。しかし、先ず考えなければいけない事は、浄土宗の教えとの関係性です。浄土宗では、

　命が終わる時に「南無阿弥陀仏」と唱えることによって阿弥陀様が迎えに来てくれて、西方極楽浄土に行くことが出来き、蓮華のつぼみのなかで仏となり生れ変わる

　という教え、いわゆる「即得往生（そくとくおうじょう）」です。ここで普通の方であれば何故すぐに極楽に行くことが出来るのに中陰の法要をするの？と疑問を抱くと思います。では次に、下の極楽に行くまでの時間と蓮の開くまでの時間が書かれた九品往生（くほんおうじょう）の表を見て下さい。

往生の位	極楽に着くまでの時間	蓮華が開く時間
上品上生	指をはじく間	すぐさま開く
中生	心に一度念ずるほどの間	一晩
下生	すぐさま(即得往生)	一昼夜
中品上生	礼拝し顔を上げないうち	やがて開く
中生	すぐさま(即得往生)	七日間
下生	元気な方の屈伸程度	七日間
下品上生	すぐさま	四十九日
中生	心に一度念ずる程度	六劫
下生	心に一度念ずる程度	十二劫

とあるように、西方極楽浄土に行ける事はすぐであっても、行った先で蓮のつぼみが開くまではかなりの差があるようです。そして、今の人間界ではほとんどの人が下品の位で生れるとあります。ではどういう人が下品上生(下品の最上位)になるのかというと、
「**仏の教えにそむくことはないが、さまざまな悪い行いを積んで恥ずかしいと思わぬ者**」
とあります。
しかしそれについて付け足しがあり、そういう人が臨終の時に阿弥陀仏の名号を唱えると五十億劫の生死の罪業を滅除し、化仏の来迎を受けて浄土へ往生し、七七（四十九）日を経て蓮華が開く、と書かれています。
　このことから、ほとんどの方は四十九日間の一般的な中陰と同じように魂はまだ裁判を受けていることとして、七日ごとの法要を行うことが望ましいと言えるでしょう。
　浄土宗を開いた法然上人も中陰の回向を大切にしていたようで、臨終の時に念仏を唱えられていなかったかもしれない、念仏していたとしても本人にしかどうなったかは分からないとの事により、自分が亡くなった時もお弟子さんが中陰の念仏を勤めていたようです。
　これらの事から長光寺では中陰を行い、亡くなった方への回向を満中陰まで七日ごとにさせて頂いているのです。

※劫とは計り知れない時間と言う意味で、例を挙げると天女が 100 年に一度降りてきて、羽衣で軽くひとこすりして、7km 立方の石が摩滅してもまだ余りある時間のことをいいます